

憲法と映画(115) 『オールド・オーク』英 監督:ケン・ローチ

<かな>



5月10日の新聞各紙は、「イギリス統一地方選挙で『反移民』を掲げる極右政党が左派・緑の党と合わせて大幅に議席を伸ばした」と報じていました。時を同じくして鑑賞した映画が『オールド・オーク』でした。

時は2016年。イギリス北東部、かつて炭鉱で活気あふれた町は寂れて、唯一のパブは古い常連が愚痴をこぼして慰め合うサロンの様相を呈しています。店の名前は、「オールド・オーク」。経営するのは TJ・バランティンという中年男性。自身の父親は炭鉱夫として働いていましたが、落盤事故で命を落としてしまいます。活気溢れる時代から30年の時を経て、自身離婚を経験し家庭が崩壊して小さな飼い犬と海岸を散歩するのを楽しみつつましく暮らしています。TJは、経営は厳しいもの

の試行錯誤しながらなんとかパブを維持していました。そんな町が、シリア難民を受け入れ始めたことで、受け入れ賛成派と反対派に二分されてしまいます。それを象徴するかのよう、パブは居場所を争う諍いの場に…。

町に活気を取り戻そうとシリア難民に支援物資を届けるボランティア活動を手伝うTJは、父から譲り受け大事なカメラを地元民に壊され、直すお金もないシリア人の若い女性・ヤラと出会います。善意でパブの隣の物置部屋を暫くぶりに開け、古い2台の一眼レフカメラを売って修理代に充てようとするのです。その部屋には30年以上前の炭鉱ストの写真や町のお祭りの写真など活気あふれる時代を映し出した写真が掛けられていました。それを食い入るように見つめるヤラは、自分の生まれた戦争前の母国を思い起こします。

年の離れた二人は、カメラを通して思いがけない友情を育むことになり、物置部屋はみんなで片付け地元民とシリア難民の交流の場家と変身するのですが、一方でそれをよしとしない一部の地元民によって壊されてしまいます。果たして、彼らは、互いを理解する方法を見つけられるのでしょうか。

卒寿間近のケン・ローチ監督は、世論に反して移民排斥では問題は解決するばかりか人と人とがいがみ合い傷つくばかりと警鐘を鳴らし、ともにお祭りを楽しむ「連帯」を選択する道を観客に提示します。